

内田魯庵全集

5

隨筆・評論 I

ゆまに書房

内田魯庵全集 第五卷

四八〇〇円

昭和五十九年九月十日 初版

著 者 内 田 魯 庵

編 者 野 村 喬

発行者 荒 井 秀 夫

印刷所 第二整版印刷所

製本所 (有) 田 島 製 本

発行所 ゆまに書房

東京都千代田区神田一―五―十一セントラル大手町

電話 (二九二)〇七九八

振替 東京四―六三一六〇

内田魯庵全集第五卷／隨筆・評論Ⅰ 目次

スウキフト論	七
馬琴の小説	一三
馬琴の文章	一五
馬琴小説の効果	一七
チャールズ、ヂッケンス傳	一九
市川白猿	三七
ゴールドスミスを評す	四二
落葉	四六
日本小説の三大家	五三
梅見ずの記	六五
安房巡禮	七八
櫻花落後の小金井	八八

綠陰茗話……………	九〇
『好色五人女』序……………	一一三
病中偶書……………	一二二
偶筆……………	一二五
枕上雜筆……………	一二九
雜筆……………	一三三
『近松世話浄瑠璃』……………	一三八
沙翁の事歴……………	一四三
失意の大改革家……………	一八四
夏と秋とに係る和歌及俳句の評……………	二〇一
小説界の新潮流(殊に泉鏡花子を評す)……………	二一八
落葉……………	二三〇
ブラジルの文豪シルギオディナルテ及び	
〈其傑作「インノーセンシア」〉……………	二三三

ノルダウの十九世紀評	二四七
「破垣」發賣停止に就き當路者及江湖に告ぐ	二五七
「破垣」について	二七一
樓上雜話	二七六
ラスキン研究の栞	三三三
トルストイ	三四四
シーボルト	三五一
リヒャルト・ワグネル	三五七
エミール・ゾラ	三六一
燈下日札	三七〇
露國の二大非戰說	三九二
兵器を焚きて非戰を宣言したる露國の宗教	四〇七
銷夏日記	四三四
銷夏雜記	四六〇

客舍雜記	四七三
夢に老翁と語る	五〇一
文章の作法	五一一
トルストイの「復活」を譯するに就き	五一四
エンサイクロペヂヤとは何ぞや	五二五
余の愛讀書	五三三
余が文章に裨益せし書籍	五三八
近時の小説に就て	五四一
解題	五四九
解説	五五四

隨筆・評論 I

スウキフト論

ジョンソン時代の咖啡茶館は文學者の俱樂部にしてアヂソン、ポープ以下の文學盡く集る、而して此間に立て奇問を發し卓落不羈なる群客を驚かせし者はスウキフト氏なり。學問論盛んなるや忽に「書籍之戰争」^{ゼ・ブック・ウォー}を著はして時人を動かし、宗教論起るや遽に「エ、テール、オブ、エ、タツプ」を著はして僧徒を諷し、一轉して文壇の元首と仰がれし者はスウキフト氏なり。氏は千六百六十七年十一月三十日を以て生れ千七百四十五年十月十九日を以て歿し、今を去る二百年前なりと雖ども其名は燦爛として文學史に輝き、傑作「ガリバル巡島記」の如きは走卒犬童是を讀まざるはなし。英のセキスピヤ西のサーバンテスは歐羅巴の文學家なりと賞讃せらるれども、多數の歡呼喝采を博せる事は未だ「ガリバル」の上に^{サタイク}出でざるなり。それ大聲は俚耳に入らず秀作は俗眼の喜ばざる處にして英國文學者の如き大抵は時に遇ず。ミルトン、ドライデン等の徒今日に追尊せらるゝも在世の日は輕視蔑如せられしが獨スウキフト氏は王侯貴人をして其筆に感服せしむ。其潑墨淋漓たる處萬人皆戰栗す、慙慚す、慷慨す、悲憤す。蓋し諷刺の巧妙なるに到つてはアヂソンも又一步を讓るが如し。其銳利直入するや頑陋の人をして猶ほ寒からしむ。「ガリバル」の

如き其趣向は希臘のルシアン既に早く是を案じ、其後襲踏する者少からざればスウキフトの功とすべからず、縱令「ガリバル」は氣骨あるにもせよ成效せしにもせよ未だ此點を以て賞すべからず。唯眞率なる文に諷刺を寓し滿天下を罵倒せし巧妙に到つては千古無比にして文學者大抵其後に瞠若せざるを得ず。當時上王公より下僮僕に到る迄スウキフトの名に恐怖せしは元より偶然にあらずして、氏の歿せし報知廣がりし時貴婦人骨牌を遊び冷然として「彼の牧師歿せしか……請ふトランプは何ぞや」ト曰ひしも怪しむに足らず。凡そ不幸の人多しと雖どもスウキフト氏より不幸なる者はあらず、才識餘りあれども微祿に安んじ、國會に代議士を畏れしむるの辨あるも僅かに邊土の農民に説教し、絶世の佳人を愛し且つ愛せられしも終に一生を獨棲に送り、卓絶不羈なる言を吐て鬱憂を洩せしも終身愁雲の中に沈み、殊に最も憐れむべきは此諷刺に富みたる氣骨ある文を作り滿天下を嘲笑罵詈し後代に到り諷刺家の王と呼ばれ當時に在ては王公貴人をして恐怖せしめしにも關はらず一人として氏を敬愛せし者なかりき。實に氏は當時の偉人なりし英國第一の權勢者なりし、上下兩院僧俗を問はずして是を需むるも氏の如き人あらず、古今の著述家を需むるも氏の如き有權者あらず。蓋し氏の筆は瑣末に拘せず叫喚に陥らず叱咤雷電の勢あれば大臣の權勢も又是に追從阿諛し其鼻息を伺ふて事を處するに到る。女王アンの腐敗時代を快罵せしは獨りスウキフト氏一人あるのみ、抑も氏をして諷刺に長ぜしめしもの既ち此腐敗時代か。

氏の傑作は「ガリバル巡島記」及「エ、テール、オブ、エ、タツプ」の二書にして、「ガリバル」の趣向は我が和莊兵衛或は夢想兵衛と全様なれども馬琴の如く理屈に陥らず、表面より見れば殆んど神女談一

班にして兒戯の書たるを免かれず、若し夫れ裏面より觀察すれば言々句々盡く諷刺の意を含み、抱腹絶倒する處は凡て痛苦刺撃の文字たり、殊に「ストラルドブラッグス」の性質を寫せし一段に到つてはサカレゝも又其巧妙に驚けり。然れども全軀より評すれば「ガリバル」より「テール」こそ傑作なり。其趣向の奇に到ては寓意小説多しと雖も能く超出する者あらじ。「ガリバル」は一定の目的もなく漫然天下を諷せしなれども「テール」は畢竟宗教歴史を小説軀にせしものにてピーター、マーチン、ジャックの三兄弟を點出して宗教改革を偶せし手際に到ては誰人も其自在なるに服せざらんや、就中エオリスムを説きてピューリタンを諷せしは氏が獨得の文字にして摸倣すべからざるものなり。老年に及んで氏が「此書を發せし時の余が才能は如何計りぞ」と嘆ぜしも故あるかな。ハラムはラベレーにも此作なしと賀稱せり。

ギッボンの自叙傳に曰く「マレット氏の勸に依り初めてスウキフト及アヂソンの著書を読む共に字句簡にして奇警なれどもスウキフトは男子の勇壯を以て勝ちアヂソンは女性の優美を以て飾らる」云々。是ぞスウキフトの文章を穿ちしものにて單純なるが故に讀者概ね味なしと云ひ、粗末なるが故に猥陋なりと罵れども、未だスウキフトの神髓を窺はざるの言也。實にスウキフトの文は單純簡傑なり然れども單純にして幾多の思想を包含し、簡傑にして氣骨凜然たるは則ちその推重せらるゝ所以ならずや。是を我國に例ふれば風來の文字に氣骨あるが如く字句に難澁なくして自然の妙味あるは博識を自負する馬琴の比ならんや。然れどもギッボン既に評せし如く男子の勇壯を以て勝つは畢竟疎策なる爲めにしてジョンソンが「スウキフトの文は峻阪を登らず深谿に下らず地盤堅き平路を障礙なく走るなり」と云ひしも實相を極めし言

にて面白く、有力なりと雖も縦横錯綜せざれば僅かに半嚮はんけんを試めて其眞味を知る能はず。殊に「ガリバル」の如き趣向は極めて幼稚なるを以て流讀一邊忽に退けて曰く「スウキフトの文は乾燥なり無味なり趣向は殆んど兒戯に類す」と。嗚呼、スウキフトの爲に嘆息すべし、兒戯に類するもの必ずしも兒戯ならんや。其眞味を悟らずして朝比奈島めぐり或は桃太郎鬼が島と同視するは嘆ずべき哉。ヒュームがロバートソンに贈る書に曰く「卿がスウキフトを偏愛するは余の常に笑ふ處なり元より一種の躰なれば是を嘉よせざるにあらずねど毫も感歎する事能はずスウキフトの文には調和せる粧飾なし流麗にあらず正確にあらず若し英國文學にして既に野蠻の區域を照したれば此著者の作を古文學の高位に置くべからず」云々。ヒュームの達識にして猶ほ此言を爲す、凡眼の退くるも又宜べなり。然れどもスウキフトの長處は調和粧飾流麗正確等にあらざして是等は却て其退くる所なりし。譬へば一步を譲りてスウキフトの文を陋猥なりとするも、デッケンス或はサカレーを卑近と罵と全く、皮相に泥どろで其神髓を悟らざるの言なり。盖しスウキフトの長ずる處は諷刺フエイクにして「ガリバル」其他の著作の推重せらるゝは唯此一點のみ。ジェツフレは公平に判斷して曰く「世人のスウキフトの文躰を見るや大に高きに過ぐ氏の文はドライデンの如く熟せずポーブ或はアヂソンの如く流麗ならずボーリングブローク侯の如く高傑ならず一口に云へば昔時文學者の高尚雅純の質に乏し（中略）然れども若し恢譎と反語を用ひて其憎惡せし者を嘲弄せし巧妙に到ては是を世界に需るに氏と競ふ者なからん」云々。サカレーも古今第一の機才家と稱し、マコーレーも最も鋭敏なる浮世の觀察者と目せり。此二人のみならずスコット、ボルテアを初め名ある文學者——中にも諷刺家は大抵氏が筆

才に服し諷刺家の王と推重すは豈偶然ならんや。一度スウキフト全集を繙けば輕妙にして氣骨ある他に此を需むべからず。唯「ガリバル」と「テール」のみにあらず。嘲弄と諷誡の妙に到ては却て短編の中に存す。殊に反語アイロニーの使用に縱横なるは基督教不可廢論或は愛爾蘭幼兒處分法アイルランドに於て見るべく、嘲弄罵詈に自由なるは千七百八年豫報に於て知るべし。氏は又詩に長ず、之より想像力に乏しく感情的の句なしと雖ども冷笑的に於ては頗る見るべし。ハズリットも氏にして「ガリバル」を著はさずんば詩人の班に列すべしと云ひ、ジョンソンも盛んに其詩才を稱揚し散文の是を歿するを惜めり。

スウキフト氏は小學に於て大學に於て既に嘲弄の才を以て聞へ、苟くも意に協はざる事あれば演說論文を以て教授役員を嘲弄す。其セント、パトリックに在るや常に詭辯を奮ふて聽衆を動かし、社會に出で諸文學者と交るに奇問奇答殆んど端睨すべからざらしむ。マコーレーの論ぜし如く失徳の政事家背教の僧侶なりと雖も、文學界より評すれば古今隨一の諷誡家にして一言一行凡て諷刺嘲弄ならざるはなし。シーザーがカッシアスを形容せし名句は又スウキフト氏を形容すべし、曰く

He reads much;

He is a great observer, and he looks

Quite through the deeds of men;—

Seldom he smiles, and smiles in such a sort

As if he mock'd himself, and scorned his spirit

That could be moved to smile at any thing.

馬琴の小説

馬琴は日本小説の大家なり、馬琴の文章は麗玄にして脚色も陳腐にあらねど日本に馬琴より外に小説家なしと思ふこそをかしけれ。百餘卷の大篇を著せし者は馬琴のみならん、二百餘種の物語を作りし者も馬琴のみならん。されども美術は長短大小に依て優劣はあるまじ、百餘卷に涉りしとて八犬傳のみが傑作ならじ二百餘種の多きを著せしとて猫の妻にては大家と云はれまじきに此二點のみを稱揚して神佛の如く崇むるこそ奇怪なれ。馬琴は小説大家の一人には相違なけれど唯一の者にてはあらじ。一派の新文脈を作りて全國を風靡せし其力の恐ろしさ、是れ又文壇の英傑なれども斯くまで馬琴に心酔するとは具眼者の少きも怪しむべし。國民之友書目十種を見るに馬琴の著書は九種までも拔擢の榮を得たれど西鶴京傳を嗜好するもの少きこそ嘆はし。七五の調を作りて俗物の愛を買ひしはさる事ながら、人情を穿ちし巧妙に到ては其磧京傳をもて日本小説の神髓となすに、未だ味はずして野卑猥褻なりと退くるは先人の苦心を知らずと謂つべし。ピツクウキクを讀し人多し傾城禁短氣を知る者なし、リットン、サツカレーを口にする批評家ありて西鶴團水に眼を丸くする小説家多し。進みたるか退きたるか我は知らねど、西洋文學に明るきも

恐ろしく日本文學に暗きも恐ろしく。